

タリスマスの祈り



綾遠 みやぎ

「どぶ」に住むこと

今年もクリスマスがやって来た。俺は毎年のように、教会でのミサに行った。

といっても、俺は信者ではない。神なんて全く信じていない。俺がミサに行くのは、正確には、ミサが終わった後のバザーと、湯気の立つ温かいスープの炊き出しがあるからだ。

これは、教会の信者のご立派な奥さん方が中心になって、「奉仕」していただけるという、年に一度のありがたい行事だ。まあ、年に一回、安いバザーと温かいだけ取り柄のスープを配るだけで、「奉仕」なんて言っている、偉そうに構えた「上の方たち」なんて、本当は軽蔑しているんだが。でも、これを逃せば、あとはもう壁にもなってくれない段ボールで作った「部屋」に、引きこもって、ようようのことで稼いだ金を、仲間内の花札ですってんてんになるまで賭けてしまっ、正月はふて寝するしかない。

そう、俺は「下の人たち」、放浪者だ。もう20年以上前に、強盗殺人を犯してしまい、刑務所に入り、出てきた時には50を越えていた。職なんて、もちろんあるわけもなく、せっかく刑務所で習った木工などの作業技術も役に立たなかった。そうして転落に転落を重ねて、今は「どぶ」と呼ばれている、この放浪者の「部屋」という段ボール小屋の集まる一帯にいる。

俺が強盗をやったのは、内縁の妻が子供をおろすためだった。俺はその頃から日雇いで働いていて、金がなく、ついうっかりして子供ができてしまったのだが、子供をおろすにも金がかかった。それで、妻には全く相談もなく、突発的に、このクリスマスの日に、パーティーをやっている家族の家に忍び込んだ。そこまではよかったが、そこの父親に見つかってしまい、度胸を振り絞って、金を出せと包丁をちらつかせながら脅したのだった。

だが、金を奪って逃げる途中で、子供に見つかり、その子をかばった父親を刺してしまった。彼は、俺の一突きで、子供を抱きしめながら絶命した。俺は観念した。自首したのだ。そのことと、俺ののっぴきならない事情が考慮されたのか、極刑は宣告されなかった。

しかし、獄中で妻が産褥で死んだと聞かされた時、俺はそれまで心のどこかですがっていた神を捨てた。俺が貧しい暮らしをしていても、支えてくれた妻が死んで、どうして俺だけが生きていけるだろう。俺には、助けてくれるような家族も、友人もいなかった。ひとりぼっちになったのだ。死のうとしても、刑務所では看守が見張っている。死なせてもくれない、人様に顔向けで

きる生活をさせてもくれない、この世界を心底恨んだ。

小城牧師との出会い

刑務所には、教誨師がいたが、この人にすがろうとも思わなかった。教誨師は、俺を改心させようと、聖書を一冊差し入れてくれたが、読む気になんてなれなかった。ただ、枕にはなった。教誨師と話すのは、気が向いた時、獄中の人間と話すのに飽きた時くらいのものであった。

教誨師は、熱心な人とおざなりに話す不精そうな人の二人が交代で来た。熱心な人は、名前を小城(こじょう)という牧師だった。俺は、刑務所暮らしも終わりに近づき、みんなが「年季奉公」と言っていた受刑期間が満期になるのをぼんやりと待っていたが、この小城牧師は、自分の教会に一度足を運ばないかと誘ってくれた。なぜそこまで言うのか、俺には分からなかった。そういうところが、聖職者らしいのかもしれない。だが、俺の心はちっとも休まらなかった。だって、娑婆に出たところで、生活が変わるわけではなく、罪がぬぐえるわけでもない。人を殺しているのだから、死んで詫びよと言われてたって、おかしくないのだ。俺の目には、あの子供を抱いて死んだ父親の姿が時々映った。そして、いつかその子供が報復をしにやって来るのではないかと思っていた。

それも、仕方ないことだ。俺は、長い刑務所暮らしで人生に疲れ、気持ちはすり減らし、捨て鉢になっていた。そんな俺の心を見抜いたかのように、小城牧師は熱心に話をするのだった。そして、ついに俺は、よろしい、あなたの教会に一度行きましょう、と約束した。

その教会は、ボランティア活動に力を入れているようで、周りにさっきも言った「どぶ」があり、放浪者がよく歩いていた。そんな、堅気の人間から見れば危なっかしい所で、教会の活動をしているのだから、小城牧師の熱意は相当なものだ。俺は、出所してこの教会に行ったとき、受洗を勧められたが、神を全く信じていませんので、と丁寧に断った。その時、小城牧師と話す俺の姿を、誰かがドアの陰からうかがっていたが、俺が視線を向けると、その気配は消えた。

これが、俺の今日にいたる略歴だ。「どぶ」の仲間内では大して珍しくもない。みんな、それぞれに事情を抱えて、転落して、ここに吹き寄せられてきたのだ。「どぶ」にいる連中は、笑っていてもその表情は、本当の顔に一枚紙をかぶせただけの福笑いの顔だ。本当の顔は、みんなどれも同じ――すり減った靴底のような、もみくちゃにされた後のシャツのような、しわだらけの、汚れて脂じみ、目を常に伏せた、「誰にも必要とされない、むしろ早く世の中から出ていけと言われてる」者だけが見せる、泥のかたまりだ。

スープ

「さあ、みなさん。スープができましたよ！！」

小城牧師の、よく通るやわらかい響きを持った声が、教会のバザー会場が撤去されて代わりに置かれた木のテーブルについた俺たちの耳に届いた。空腹を抱えた俺たちは、待ちかねて座ったまま足踏みしていたが、その声が聞こえると、わあっと歓声を上げた。

この時ばかりは、小城牧師が、その満面の笑みで言ってくれる。

生きなさい、生きなさい、生きていてください、みなさんにはこのスープを召し上がる価値があるのでしょ。

価値！！この言葉が、こんなに重みを持つ場所も少ないだろう。実際、年に一度、自分であくせく働かずとも、「そこにいるだけで」温かいスープが保証されたこの空間に、「どぶ」の連中は、己が生きていてよいのだ、生きる価値があるのだ、人間なのだということを感じることができるのだ。人間にとって、その確認がどんなに大切かは、人生をすり減らした者にしかわからない真理である。年をとっていても、それに気づかぬまま死ぬ者もあるし、若造でも「どぶ」に来て、いやというほどこれを味わった連中もいる。人生なんて不平等なものだ。

小城牧師が、スープをお玉から、お椀に注ぎ始めた。今日は、奥さん方もエプロンにひつつめ髪という、主婦らしい格好で、あちこち動き回っている。他の教会では、お椀を持って一人一人並んで、注いでもらうらしいのだが、ここは違う。レストランのように、テーブルについている者に、自動的にスープが配られる。しばし、自分が「どぶ」の人間だということを忘れることができるのも、このクリスマスの楽しみだ。

俺の前にも、ほかほかと湯気の立つスープがそっと置かれた。周りとは少々お椀が違って、俺のはスープ皿のような上等のものだ。他になくて、ありあわせを使ったのだろうか。それにし

ても、今日は人間らしい扱いをしてもらえる、年に一度のお祭りだ。神は信じてはいないが、本能を刺激するこの楽しみが、もし神から与えられている、と言われたなら、ありがたくいただいた後で、ならば全能の神様、毎日スープをください、それ以上は望みません、と答えるだろう。もっとも、そんな野暮な言葉は、小城牧師は決して言わない。信者も、そうでない者も、一緒に食卓を囲むのが大切なのだと言うであろう。

俺は、自前のスプーンで、さっそくスープをかき混ぜた。湯気がたゆたい、ぷんといいいにおいがする。これは、いつもの年よりうまそうだ。

玉ねぎ、人参、白菜、ごぼう。ああ、いいな、俺だけが食べてよい、俺だけのスープ、俺だけの食事の時間。

連中も、一言も言わずにすすっている。この至福を、一人でじっくり味わいたいのだ。また明日からは、相も変わらずアルミ缶集め、古紙集め、日雇い土木作業、という日々が続くのだから。他人の干渉しない、自分だけの至福、それが小城牧師からのクリスマスプレゼントだ。彼は、スープを注ぎながら、みんながうまそうにスープをすする様子を眺めて、嬉しそうに笑っていた。スープは、教会の前に設営されたテントの中の仮厨房で作られていたが、もうもうたる湯気で、誰が作っているのかまでは見えない。ただ、例年になくうまいのは確かだった。

思わぬ再会

スープがなくなると、自然に散会となった。多くの者は「部屋」に戻り、またあるグループは花札をするために、ちょっと広めの「小屋」に集まる。俺は、腹がいっぱいになって満足しながら、今日はゆっくり眠ろうと、賭けには加わらないことにした。

帰ろうとすると、小城牧師から野中さん、と呼び止められた。

「なんですか」

少々眠気が来て、とろんとした目を向けると、彼は少しためらいながらも、はっきりした声で言った。

「会っていただきたい者がおります。少々、お時間をいただけませんか」

「いいですよ」

俺は何の考えもなく、満腹感に酔いしれながら言った。

小城牧師は、設営テントの方へ行ったが、やがて一人の女性を伴って戻ってきた。

「家内の純子です」

「あ、どうも……」

「主人がお世話になっております」

私たちは会釈を交わした。純子さんは、まだ若いきれいな女性で、どこかおびえているように見えた。手を組んだり、擦り合わせたり、落ち着かない。小城牧師が、沈黙した我々に助け船を出した。

「今日のスープは、純子が作ったんですよ」

「そうですか。大変美味しかったです。ありがとうございました」

俺がまた頭を下げると、純子さんは少しビクッとしながらも、にこっと笑って、どういたしまして、と礼を返してくれた。

「純子、言っているのかい」

小城牧師が、小声で言うのが気になった。何かあったのだろうか。純子さんは、軽くうなずいた。

「スープは、純子が作りました。あなたのお皿も、純子が選びました。純子は、あなたのスープを注ぎ、少し多めに具を入れたそうです」

「はあ、なんのために、そんな、わざわざ……」

小城牧師は、純子さんをもう一度見た。純子さんは、ぎゅっとこぶしを握りしめてうつむいたが、やがて微笑んで俺を見つめた。

「野中さんのことを知っているから」

「え？」

そう言われても、純子さんの顔は思い出せない。困っている私に、純子さんは優しく言った。

「私、村田陽介の娘です」

そう言われて、俺はくらくらと世界が回って崩れ落ちるように感じた。

この女性は、俺が殺した父親の、子供だった！そして、そうだ、あのお嬢ちゃんが……絶命した父親を腕の中で見つめていたあの女の子が、ここにいたのだ！

俺は、思わず純子さんの足元にひれ伏した。純子さんは、さっと俺を助け起こした。ひざががくがくして、うまく立ってられない俺のために、小城牧師が椅子を持ってきてくれた。座って、深く息をつくとき、ようやく事態が飲み込めてきた。

「純子さん、俺は、あなたのお父さんを……」

「分かっています」

純子さんは、俺の肩に手を置いた。そのぬくもりは、昔の妻の手のように懐かしさを感じる、久しく感じたことがなかった、俺を慈しむような感覚だった。

「みなさんは、その後……」

「家族は離散しました。兄弟は母に引き取られ、私は父方の祖母に引き取られて、そこで育てられました。それが、この教会だったのです。私は、昔は悪夢とあなたを責める気持ちで、夜も眠れないほどでした。……でも」

純子さんは、うなだれる俺にそっと語りかけた。

クリスマスの祈り～恩讐の果てに

「主人と知り合って、彼の説教を聞くうちに、変わったのです。恨むな、赦せと。恨むことは、誰にでもできる、地獄への第一歩。赦すことは、困難だけれども天国につながる鍵。そう、言ったわよね？」

小城牧師がうなずき、純子さんは語り続けた。

「あなたは、十分に償いをなさいました。遺族が言うのです。生きてください、と。あなたが極刑にならなくて本当によかった。そうしたら、こうやってお話をしたり、スープをお配りしてお近づきになれないところでした。食卓には、いつも主がいらっしゃるというのが、主人の持論なんです。だから、最後の晩餐があったのだと。主の陪食の席に連なる、私たちは、今日はあなたがたのお食事にも奉仕させていただきました。みなさんと、この社会が少しずつ変わるように、私たちも頑張りますから、野中さんも決してやけにならずに、いつでも教会においでください。教会は、信者だけのものではありません。迷えるもの全ての集う場所です。あなたは、十分に苦しめました。そうでしょう？」

こうした優しい言葉を、他ならぬ遺族から聞こうとは思っていなかったのも、俺は呆然としていた。小城牧師は、やはりにこにこ笑っていた。

「このような……こんな、俺を、あなたは……」

「そんなあなただからこそです。主もおっしゃいました。丈夫な者に医者はいらない、私は罪人を招きに来たのだ、と」

俺の涙は、ぽろぽろとこぼれはじめた。不意の優しさ、親切に飢えているときの温かさが、どれほど人間の支えになるかわからない。俺は、子供のようにしゃくり上げた。

赦された、赦された。俺は、生きていて、いいのだ。

俺を囲む牧師夫婦は、ただやわらかい笑みを浮かべながら、そばで手を握っていてくれた。

俺は、天を見上げた。

20数年前の、孤独な犯罪者としてのクリスマス。

今の、贖罪者として、優しい人たちに囲まれたクリスマス。

俺は、命を奪ったその手で、自分の糧を稼いで生きてゆく。その強さをください。

神様、どうか……。

俺は、いつの間にか祈っていた。祈るのが、自然だった。そして、牧師夫婦も祈った。

俺たちは、三人で、いつまでもひざまずいていた。

(了)

あとがき

本作品を読んでいただきまして、まことにありがとうございます。著者の綾遠みやぎです。

この作品は、クリスマス企画作品として執筆しましたが、お気に入りの作品でもあるので、電子書籍化しました。

祈りと赦し。それが、この作品のテーマです。ですから、表紙はA・デューラーの作品を用いました。

「俺」は、元犯罪者で、強盗殺人を犯しました。のっぴきならない事情があったとはいえ、罪は罪。刑務所暮らしを経て、「娑婆」に出てきたものの、元犯罪者を雇ってくれる職場などなく、転落していきました。そして、いつかは殺人を目撃した子供に復讐されるのでは、と思いつつ、それも仕方ないことと思い、あきらめていました。

彼を救ったのは、ほかならぬ遺族で、目撃者の純子でした。彼女は、「赦し」たのです。小城牧師と出会うまで、彼女はどれだけ苦しんだことでしょうか。しかし、「祈り」を覚えたことで、罪を犯した犯人を赦すことができるようになったのです。

「罪を憎んで人を憎まず」という言葉がありますが、実際にはとても困難なことです。しかし、純子はやってのけました。それは、彼女がキリスト者だったからかもしれません。信仰を持つことは、それほどまでに強いのかもしれない。そんな思いで、この作品を書きました。

人を殺していなかったとしても、人は罪を犯しつつ生きています。ドストエフスキー『罪と罰』に、主人公の妹が、「私はまだ人を殺してはいないわ」と言って、彼を卒倒させる場面があるのですが、私はこの言葉に疑問を持ちました。

私も、また罪深い。

犯罪を犯した人間の受け皿がない社会、「応報」的処罰を望む社会……。そんな世のあり方に、一石を投じることができれば、幸いです。

クリスマスの祈り

<http://p.booklog.jp/book/98256>

著者：綾遠みやぎ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/shoshokan/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/98256>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/98256>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ